
赤い目

藤原杏樹

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤い目

【Nコード】

N2179D

【作者名】

藤原杏樹

【あらすじ】

今年の水嶋中学校のある七不思議が起こる年。その七不思議とは、20年前にこの学校に転校してきた赤宮美由紀の復讐だった。その復讐に立ち向かう穂乃香達。しかし、この七不思議には裏があった

……

プロローグ（前書き）

多少グロも入る可能性があります。
そういうものが苦手な場合は見ないでください。

ブローグ

ブローグ

あなたは知ってますか？

“赤い目”

これは、遊びなんです。ある悪魔の。

真っ赤に染まった赤い目。

赤い目をした人は……

殺されちゃう……かもね

ある村の小さな学校に

転入生がやってきました。

その子を見た人は驚きで声が出てきませんでした。

なぜなら、その子は……………

“ 赤い目 ”

をしていたから。

その子の名は美由紀。

あかみや みゆき
赤宮美由紀。

美由紀はその後、村人に……

殺された。

そして、10年後に起こった、あの……

大事件。

それは、この美由紀の怒り。

そう、

”
復讐
“

第1話

第1話

2017年、10月2日。金曜日。

私は、佐倉穂乃香^{さくら ほのか}。私の学校には、ある七不思議がある。そのうち、1つが今年にも起こりうる、恐怖。

20年前、この学校に転校してきた女の子がいた。その子の名は赤宮美由紀。その子は、赤い目をしていた。恐怖でおびえた村人達は、美由紀を殺した。明日は、その美由紀の命日。七不思議では、10年ずつに、美由紀が復讐してくるという。10年前に、美由紀は復讐してきたからだった。

「穂乃香ー明日やばいよね」

私に声をかけてきたこの子は、私の友達^{なかはら}の中原美鈴^{みすず}。見た目はちよつとギャルっぽいところがある。茶髪で、耳にはいくつもピアス。メイクもちよつと派手。よくよく考えてみると、ギャルっぽさは“少し”ではないと思う。かなりギャルっぽい。でも、中身は凄^{すご}い優しくて、噂好きのただの女の子。

「そーだよー。穂乃香ー大丈夫かな」

そう言っ^{あんどつ}て心配してる子は、安藤雪^{ゆき}。少しおっとりしていて、心配性。見た目は、目も大きいし、鼻も高いし、凄^{すご}い美少女。スタイルもよくてモデルみたい。その容姿のせい^{せい}か、雪は凄^{すご}くモテる。

「大丈夫でしょ」

そう言っ、私は軽くながした。私は正直、すかした顔をしていながらも、この七不思議を信じていた。つまり……恐かった。なん、今年に限ってそういうのがあるのだろうか、神様に怒りをぶつけている。

「今日は転人生がやってきた」

そう、先生が言っ、とても背の高い女の子が入ってきた。その子は、雪に負けないくらいのスタイルだった。あと、特徴的なのが美白の肌。肌が焼けて黒い先生が近くににいるせいか、異常に白く見える。

「はじめまして。赤宮^{あかみや}美由紀^{みゆき}です」

私はその言葉を聞いたとき、一瞬固まった。なぜなら……

“赤宮 美由紀”

その名前は……

あの、美由紀の呪いの……

美由紀だった。

第1話（後書き）

出来れば感想くださいね^^

第2話

第2話

「美、美由紀？」

「佐倉、どうした。顔がちよつと青ざめてるというか……」

「あ、いや、なんでもないです」

「そうか、ならいいが」

美由紀……。この名前を知っているのは私だけだろうか。そのとき、ニヤツとした顔をしてこつちを見ている子が1人いたのに、私は気づかなかった。

「じゃあ、赤宮は、野中の隣でいいな」

そういわれた恵介は、目がキラキラしていた。きつと、恵介は“のなか 恵介は”美由紀”という名前を知らないのだろう。この恵介とは、野中恵介、つまり美由紀の隣になった子だ。恵介は、サッカー部に入っているスポーツマンで、いつも一生懸命のいい奴。明るくて優しいから、クラスの中心であり、人気者である。しかし、優柔不断な性格のせいか、やりたくもない学級委員をやっている。

ひとつ言っ てなかった事があった。美由紀からの復讐は1日では終わらないそうだ。そして、10年ごとに多くなつていくらしい。前は1ヶ月だった。そう、もし今年も復讐があるのなら、1ヶ月以上復讐されるってこと。

「野中、手挙げる」

「え、なんで」

「場所知らせるために決まってるだろ」

「あ、そっか。はい」

そうやって手を挙げた恵介の方に向かってくる美由紀。その顔はとてもきれいで、女でも見とれてしまうほどだった。でも、なぜか悪い予感がして、そのときに気づいていれば……今みたいな事にはならなかった。なぜ……予感してたのに……。

「あの、よろしく」

ちよつと恥ずかしそうに恵介が言う。

「よろしく」

それを軽く流す美由紀。なんとなくだけど、フィットしてるかも、この2人。そう思ってた、その時、美由紀の前に居た桜木隆志さくらぎ たかしが恵介に笑いながら言った。

「美由紀ちゃんの隣、うらやましいぜ。いいな。恵介は」

隆志も、美由紀のことは知らないのだろう。私だったら隣になんてなりたくない、そう思ってしまう。美由紀があ的美由紀でないことを、今は…願う事しか出来なかった。

「フフフ」

その時間こえた声。“フフフ”。ゾクツとする声で後ろから聞こえ

た。その先にいたのは……

赤い目をしたあの人だった……。

第3話

第3話

「い、いや……。」

私は恐くなって、叫ぶ事も出来なかった。だって、そこにいたのは……

“赤い目”になった恵介だった。

「け、恵介？」

「お、なんだ？ 佐倉」

「恵介……目が」

「目？」

「う、うん」

恵介は不思議そうな目でこっちを見てくる。恵介の赤い目に気づいてるのは私だけだろうか。美鈴達は気づいていないのだろうか？ そう思い、そっと美鈴の方を見る。美鈴は黒板の方を向いていた。だから気づいてはいないだろう。ただ、雪だった。こっちを向いておびえている様子。そう、雪は気づいていた。美由紀という名前も、赤い目の恵介も。

「目が何？」

「言えない……」

「なんで？」

「クッ……殺されるから」

「こ、殺される！？」「

恵介は“殺される”という言葉聞いて大きな声を出した。それに、皆は反応する。

「野中ーどうした。ん？野中、目が赤いぞ」

「目が……赤い？ そ、そんな……」

そうか、恵介は、美由紀の呪いの内容は知ってるんだ。でも、何で恵介が？ やっぱ、美由紀とはあの美由紀の事だったのか……。もしそうだったのなら、皆が危ない。だけど、私に出来ることなんてない。終るまで待つことしか私にはきつと出来ない。そんな自分が嫌で、私は涙を流しそうになった。

「俺は、ここで死ぬのか？ そんなの嫌だ。誰か……助けて」

「何を大袈裟に言ってるんだ。さあ、授業始めるぞ」

先生は何もなかったかのように授業をはじめた。ただ、その時恵介だけは、ずっとずっとおびえていた。私はその姿が見ていられなくて、「おなか痛い」とうそをつき保健室へと向かった。

「どうすればいいの。恵介……これはほんとに美由紀の呪い。あの、美由紀？」

「あ、あたし？」

美由紀がその私の小さな声を聞き取って話しかけてきた。私はそ

の時少し恐くなって話すときに声が震えていた。

「え、えっと、美由紀ちゃんじゃないよ。他の子のこと」

私は少し目をそらして言った。

「そっか。でも……“呪い”って」

「この学校の七不思議」

「どんなの？」

「えっとね」

こうやって、私は美由紀に“美由紀の呪い”の話をし始めた。

あるところに静岡市立水嶋中学校という中学校がありました。そこに、ある日転入生がやってきました。その子を見た生徒や先生、村人までもが驚きの声を上げました。なぜなら、その子は赤い目をしていたからでした。ただ赤い目をしていたのならば、充血だと思うでしょう。しかし、その子は黒目の部分が赤かったのです。その子を恐ろしく思いおびえた村人達は、その子を殺してしまったといえます。その子は死になくなかったのに殺されてしまったため、村人達を恨みました。そして10年後、その水嶋中学校に復讐しにいったのでした。

「その子、美由紀っていうの」

「うん……」

「そっか。10年後の復讐ってどんな」

「10年後の復讐はね……」

第4話（1）

第4話

10年後の復讐。それは突然起こったのでした。

ある日、美由紀が転校してきた日の10年後、2007年10月3日の出来事でした。水嶋中学校に、桜井瑞希さくらい みずきという女の子がいました。その子の親の友達は、美由紀を殺した村人の娘でした。瑞希はその人と仲がよかったため、美由紀の話を聞いたことがありました。その美由紀が殺されてから今日がちょうど10年目だということも知っていました。

「梓！美由紀の呪いって知ってる？」

「美由紀？ 誰？」

「なんか、赤い目をした子らしいんだけど」

「赤い目？ そんなのそこにもいるじゃん」

雪原梓ゆきはら ずきがさした指の先にいた子。その子は、確かに赤い目をしていた。そう、充血ではない、あの美由紀の目。

「どういうこと？ ほんとに」

「は？ なにが」

「美由紀の呪いで、赤い目になった子は死んじゃうらしいの」

「死ぬ？ 馬鹿らしい。そんなの嘘でしょ」

「嘘だったらいけど……でも」

「じゃあ、あの子が死ぬってことでしょ。ありえない」

「そう……だよ」

このときはそう思っていた。美由紀の呪いなんてあるはずないの

だと。でも…次の日になってみて、私は驚きを隠せずにいた。なぜなら…先生がこんなことを言うから。

「2年4組の長谷川理香子^{はせがわりかこ}が昨日、お亡くなりになった」

そう、長谷川理香子。この子は、昨日見た赤い目の子だった。私は思わず梓の方を見た。すると、梓もこっちを見ていた。すこし…震えながら。

昼休みになると、梓は私に話しかけてきた。その声は少し怯えていることが分かるようなか細い声。私に助けを求めてくるかのようで、私はすこし戸惑った。私だって、いつ赤い目になるかも分からないから、恐くて、助けてもらいたいのに。

「瑞希……どうしよう。呪い、本当だったのかな」

「梓……私もどうすればいいか分からないよお」

その後、沈黙が続く。私は声が出せなくて、何を言えば分からないくて焦っていた。そのしばらくの沈黙を破ったのはあいつだった。

「瑞希と梓じゃん。どうしたん？」

「冬夜……」

私の幼馴染の高橋冬夜^{たかはし とつや}。見た目はすこしかっこいいから、モテるところもある。サッカーをやっていて、水嶋中のサッカー部の期待の星。フオワードをやっているストライカー。前の試合ではハットトリックを決めたとか。

「何、2人ともそんな深刻そうな顔してんの？」

「本当に深刻なの」
「何で？」

冬夜が興味深そうに目をキラキラさせながら聞いてくる。

「それが、美由紀の呪いが……」
「あ、俺知ってる。それが」
「本当に起こったの……」
「え……ありえないだろう」
「理香子ちゃんいるじゃん？ 赤い目だったの。死んじゃった……」
「えっ」

冬夜はすごく驚いてる様子だった。でもこれは事実で、これから私達の身にも起こるかもしれない。だから……冬夜、助けて……

「俺等の周りに美由紀がいるってことか？」

その言葉に私はハツとした。忘れていた。美由紀の存在を。

「そう……だね。でも……どうすればいいの……」
「俺達が出来る事……」

そう、それが分からない。私達に何が出来るの？ 私達は、この美由紀の存在を自らの手で消す事、それをするためには何もなくなるものはないだろう。ただ、自分のために、自らの手を汚すだけ、そう……考えるしかなかった。

「私達に出来る事、それを考えなくちゃいけないね」

梓は伏し目がちに言う。それが、私達をもつと不安にさせる。で

も、梓が言う事は本当に私達の難題でもある。美由紀の存在を消すといいつつも、何をすればいいのかは分からない。

「そうだね。もう、復讐させないようにするってことだね」

「そうか。なら殺せば……」

「殺してもダメだよ。元から美由紀は死んでるはずだもん」

「そうよ。もう1度殺したら復讐だって激しくなる」

「なら、美由紀がどうやって赤い目にしてるのかを探ろう。ずっと後をつけていれば、きっと分かるさ」

この冬夜の一言に私達は賛成だった。だから、美由紀の後をつけようと思った。でも肝心なことを忘れていた。美由紀がどこにいるのか分からない。それに、名前も変わっているかもしれない。これから美由紀の呪いをとめるのは、とっても長くなりそうだ。

第4話(2)

美由紀探しのために、私達はまず全学年に聞きまわる事にした。3学年各学年6クラスの私達の学校で、たった一人の美由紀を探すのには苦労した。1年1組からいつて只今3年5組が終ったところ。残すところ後1つになった。

「あのー失礼します。このクラスに、美由紀さんという人を知ってる方いますか？」

「んー美由紀？ 知らない」

この後にも何人もの人に聞いた。でも、“美由紀”という名前をしている人はどこにもいなかった。これでは分からない。あの……美由紀は。

「どうしよ……。見つからないよ、美由紀」

「名前が違うんじゃないか」

「……もしそうだったとしても、どうやって見つけるのよ」

「……そうだな」

梓の一言に強気な冬夜も黙り込んでしまう。その間私達も案が浮かばず、周りに異様な空気が漂う。しばらくの沈黙が続く中、遠くから足音が聞こえてきた。

——コツコツコツ

「あの……赤宮美由紀を探してるって聞いたんですけど」

「はい。そうなんです。知ってますか」

「いや……本人っていうか……美由紀の情報を知ってるんです」

「美由紀の……情報」

美由紀のことを知っている人が他にもいたということなのか……
いつにない真剣な顔で聞く冬夜が、不安をもつともっと多くさせて
いる。でも、そんな冬夜を頼もしく思えていた。

「美由紀の情報、教えてもらえますか」

「……はい」

そう、あおやま りじこ青山莉子は美由紀のことを話し始める。その声は、すこし
透き通ったようなきれいな声で、大人な感じを想像させる。でもそ
の顔は怯えた様子で、すこし震えていた。

「美由紀は10年前にこの学校に転校してきたんだけど、どこから
転校してきたのが不明な の。美由紀は人に何かを話したことが
なかったから。何かを聞かれても黙ってて」

「声を……誰も聞いたことがない」

「そう。ただ、美由紀の隣にいたやぶ こうた数浩太だけ、一度声を聞いたこと
があった らしいの。その声は女の子とは思えないようなちよつと
恐い声だったらしいわ」

「……恐い声？ どういうこと」

「なんか、ゾクツとするような……」

私は考えてみた。あんまり話さないけど、その声はすこし恐い……
…。

「そんな人……いる？」

「うーん。いないと思う。冬夜は？」

「俺も」

皆知らなかった。せつかく教えてくれた情報も、私達には無意味

となつてしまった。ただ、これから調べてくうえでこの情報はよい資料になつただろう。

「そうなんだ。探してるんだよね。私もそれっぽい人を見つけたら言うね」

「ありがとうございます」

その言葉を聞いて、本当に莉子はいい人なんだともう一度思う。でも、このままで美由紀は見つかるだろうか。美由紀を見つけなくては始まらない。被害は広まっていくばかりだ。他の情報はないだろうか。

「さて……これからどうする？」

「そうよね」

梓は少しくらいため息をする。

「死んじやった人……」

私は冬夜が小さな声で呟いた声を聞き逃さなかった。

「それだ。理香子さんのご家族や友達に理香子さんの様子を聞いてみよう」

「……そうしよう。まだ何もやることもないんだし」

そして、私達は理香子さんの家に行くことになった。梓の友達に理香子さんの家を知っている人がいたからその人に案内してもらうことになった。

第4話(3)(前書き)

出来れば感想お願いします!!

第4話(3)

——理香子家到着

「ここが理香子さんの家」

少し不安相に梓が言う。

——ピンポーン

「はい」

まだ理香子の死を悲しんでいるかのようなくらい声で言葉を発する家の人。

「はじめまして。理香子さんの学校の桜井瑞希といいます。理香子さんの事で聞きたいことが あって伺いました。お話を聞かせてもらってもよろしいでしょうか」

「……まあ、このままなんですから入ってください。今あけますね」

「ありがとうございます。」

「あの、聞きたいことって……」

「あ、理香子さんの死の直前の様子を教えてもらいたいです」

この言葉を聞いた理香子の母は、内心驚いたようで、その後には怒りがこみ上げてきたのか私達を少しにらむ。

「それは冗談でしょう？ 私に理香子の死のことを話せって言うの。私の気持ちがあなたたちに分かるかしら。私は愛する子供を失ったの。あなたたちに話すことなど何もないわ」

「私達の命にも、もしかしたらああなたの命にも、この世の命に関係することなんです」

「なぜ……」

「それは……赤い目です」

そのとき、理香子の母の顔が一瞬にして変わった。その顔は何か恐ろしいものを見ているかのようだった。その顔に、私は確信した。この人は赤い目について何か知っていると。

「何か知っているんですね」

私が言う前に、冬夜がその言葉を口にした。

「……理香子が復讐にあったというの」

「それは分からないけど、ただ理香子さんの赤い目を目撃した人がいるんです。でも、何で知ってるんですか」

「私も水嶋中を卒業したから。その噂を聞いたことがあったのよ」

「噂……」

「理香子の様子はいつもと変わらなかったわ。ただ理香子が死んだ日に、私は耳鳴りがしたのよ。何かあるとは思ってたけど、理香子が死ぬだなんて……」

理香子の母は泣きながら話してくれた。聞いている私はただただ聞くだけで、いい言葉なんて一つも出てこなくて、私の出来なさが悔しかった。

「赤い目について知ってること、教えてもらえますか」

優しく話す冬夜。こんなときには頼りになると改めて思う。

「私が知ってることは、赤宮美由紀という人に会ったことがある人を知ってる、それだけよ」

「その人……教えてもらえますか？」

「ええ」

美由紀に会ったことがある人なんているとは思ってもみなかった。その人に会ったら何か分かるかもしれない。分からなくても、こうやってまた新しい情報が手に入るかもしれない。今はただ、こうやって何もかもを手探りで探していくことしか出来ない。私達はできることを精一杯する、それでいいと私は思う。

第4話（4）

美由紀のことを知ってる人、その人の名を坂木裕人^{さかき ひろと}という。その人はIT関係の仕事についていて、昔美由紀と同じクラスになったことがあったという。その頃の美由紀といえば、話をすることはあまりなくいつも黙っていた。しかし、ある時に美由紀と話をするこ
とが出来た。そのときの美由紀は悲しそうな顔をしていたと。そんな美由紀の話を聞いているうちに、ひとつのことが分かった。それは今までに聞いてきた話とは少し違った。

「赤宮美由紀は本当の名前ではない」

「どういうことですか」

「美由紀の本名は、春日憂妃^{かすが ゆうひ}。この名前を隠していたのには理由があるそうだが、そこまでは聞けなかった。彼女は泣いていた」

「その話、美由紀から聞いたんですか」

「そうだ」

「他に知ってることは」

「彼女は生きていることを凄く喜んでいた。親からは虐待を受けた
りしてひどい生活を送っていたみたいだけどな。それでも、自分は生きていられるから幸せだ。そう言っていた」

とてもびつくりした。美由紀が生きていることを喜んでいた、それを坂木に話していた。美由紀はなぜそんなことを言ったのだろうか。
美由紀の家族はどんな人だったのか。

「そのときの美由紀は、赤い目だったんですか」

「ハハ。赤くはなかったよ。普通の目だった。突然だったんだ、何
がなんだか彼女も分からなかったみたいだ。どうして彼女が殺され
なくちゃいけなかったのか、俺はまだわからない」

その坂木の悲しそうな目を見てみると、どうも美由紀のやったことではないような気がする。他の誰かが美由紀がやったかのように見せかけて、犯行をしてるのではないかと。しかし、この奇妙な事件を普通の人間が出来るだろうか。赤い目にするなどできはしないだろう。だから早く美由紀を見つけなくてはいけない。美由紀を見つけて早く復讐をとめなくては。

「ありがとうございます。またくるかもしれません。そのときはよろしく願います」

「……おう」

「では」

そして、私達は坂木のもとを後にした。坂木の目には涙が潤んでいるように見えた。私達は、美由紀を見つけるために学校へ行く。そこで、理香子の友達に話を聞くことにしている。私達は学校に着くまで、誰一人、喋らなかつた。

第4話(5)

学校に戻ってきた私達は、理香子の友達であつた鈴谷蘭すずたにらんと近藤瑠依こんどうに話を聞くことにした。

「理香子さんが死亡する前に、何か変な言動はありませんでしたか」

「私は思い浮かばないけど」

と、蘭が悲しそうに呟く。

「理香子はいつもと変わらなかったわ。だからこそ私達は……」

「そうですか。分かりました。理香子さんが死ぬことはなかったのに」

「本当よ。でも何かあつたら協力するわ。理香子のこと考えてくれるみたいだし」

瑠依も私達を認めてくれたように話す。

「私もよ」

「ありがとうございます」

結局、学校に戻ってきてても新しい情報は今のところ得られていない。この後も、クラスの人に聞いてみたが情報はない。もうそろそろ諦めようかと思っていたそのとき、グラウンドが騒がしくなってきたことに気づく。廊下の窓からグラウンドを覗いてみると、そこには有りえない方向に手足が曲がったある女性が横たわっていた。

「何……あの人」

「やばいよね」

「ちよつと下りてみようぜ。もしかしたら、美由紀のせいかもしれ
ないし」

「う、うん」

冬夜を先頭に、私達はグランドに出る。そのグランドにはあの女性^{あいつ}がいたが、それに私達は気づかなかった。

「亜美！ 亜美！」

そう叫ぶ人がいた。この女性の名前は鮎川美紗緒^{あゆかわ みさお}。美紗緒によると、死んでいた女性の名前は水谷亜美^{みずたに あみ}。亜美はいつもニコニコしていて、小さいために女性からの人気が非常に高かった。亜美の顔を確認してみると、その目は黒目だったはずの部分が赤く染まっていた。

「亜美さんは、美由紀の復讐による被害者だ」

「美由紀の復讐？ どういうことよ」

美紗緒は冬夜の言葉に納得いかないようだった。それもそうだろう、大切な友達が死んでしまったのだから。

美紗緒には友達が亜美しかいなかった。美紗緒は以前女子からいじめられていた。その美紗緒を見て、亜美はいじめをしていた子を説得して美紗緒を救った。美紗緒と亜美は、それから大親友になっていた。そのため美紗緒は亜美を一番大事にし、亜美が死んでしまったことに気づいたときは、自殺しようとしていたのだ。間一髪で冬夜が止めに入っただ、それほど亜美が大切に、大好きだったのだらう。

「この赤い目。昔に美由紀という女性が殺されて、美由紀はその復讐^{ふしう}をしてきているのです。彼女は復讐の際、赤い目にして殺しているのです。だから、亜美さんは美由紀の復讐によって殺されたってことです」

「なんで亜美が」

「それは分かりません。これ以上被害者を増やさないためにも、話

を聞かせてもらえませんか。私達は、美由紀の復讐について調べてるんです」

「……何も話すことはありません」

「そう……ですか。なにか話せることがあったりしたら、言ってくださいね。では」

残念ながら、美紗緒から情報は得られなかった。しかし、亜美の腕には牛のようなマークがあった。もともと在ったものか、後から出来たものかは分からない。ただ、後から出来たものだとしたら、何か手がかりになるかもしれない。

第5話

第5話

「私が知ってるのはここまで」

「そっか」

「うん。でも、この後人がたくさん死んでしまったらしいよ」

「……怖いね。でも、私本当にその美由紀じゃないよ」

「うん。分かってる」

とは言いつつも、やっぱりまだ美由紀を疑ってる。同じ名前だし、こんなにタイミングよく転校してくるんだもん。それに……一人目の被害者が恵介なんだもん。

「私……何か出来ないかな」

「え……」

「私同じ名前だから、なにか美由紀を助けてあげることが出来るかもしれない。皆を助けてあげる事が出来るかもしれない」

その言葉を聞いて、美由紀のことを犯人だと思うのはいけないことなんじゃないかと思ってしまった。この事件を解決していく上で、きつと美由紀は欠かせない人物となることは分かっている。いや、ただ私の勘だけど、きつとそう。そう……思っている。

「一緒に調べようよ」

「え……」

「一緒に美由紀の呪いのこと、調べようよ。10年前の瑞希みたいだよ」

「……いいの？」

「当然」
「じゃあ」

美由紀の顔は笑っていた。私に見せてくれた初めての笑顔。今まで見た中で、最高の笑顔だったかもしれない。つい、自分も微笑んでしまった。

——キーンコーンカーンコーン

気が付くと、もう4時間目が始まる時間だった。急いで教室に戻ると、そこには怯えた雪と恵介の姿があった。

「穂乃香！ 恵介が……」

「うん」

「……穂乃香。なんで美由紀ちゃんがいるの」

「この子は違うよ。あの美由紀とは違う。力になりたいって言うてくれた」

「でも」

「雪、一緒に美由紀のこと調べよう」

「……わかったよ」

美由紀のことを調べる準備が整っていく。あとは美鈴がはいってくれればいい、そう思った。

「雪、美鈴は？」

「美鈴は例の人のところ行ったよ」

雪が言う例の人。それは、美鈴の彼氏、高野悠樹たかの ゆうきのことだ。悠樹は3年だから、逢うためにはわざわざ反対側の校舎に行かなくてはいけない。だけど、美鈴は昼休みになったら凄い速さで逢いに行く。

私達は友達なのに、休み時間はほとんど悠樹のところに行ってしまう。

「また？ 私達のことどうでもいいんじゃないの」

「そんなこと……ないでしょ」

「だって」

時々不安になる。美鈴は私達のことを友達だなんて思っていないんじゃないかって。だけど、私は弱虫だから美鈴に聞くことは出来ない。本当のことを聞くのが怖い。

「あれ？ 穂乃香達、何集まってんの。何の話」

「美鈴……」

「なに」

「美鈴ってさ、私達のこと本当に友達だと思ってるの？」

私は驚いた。雪が、その言葉を言ってしまったから。

第5話（後書き）

10年前にあったこととか、20年前にあったことなどは、また他の機会に書かせてもらいたいと思っています。今、勉強などで忙しくなかなか更新が出来ていません。これからもそうなると思います。ですが、必ず完結させるつもりですので、長い目で見てください。あ！あと、出来れば感想とかお願いします！！

第6話（前書き）

遅くなつてすみません！

第6話

「雪、何言ってるの」

「美鈴はいつも彼氏のことばかりじゃない！ 私達とは遊んでくれない。私達のことを友達だと思ってくれてるのか分らないよ」

私が思ってることを全部言ってくれる。雪はいつもと違って、本気で怒ってるみたい。

「友達って思ってるよ。ただ、今は彼を失いたくない」

「そんなの言い訳じゃない」

「言い訳じゃないよ」

「じゃあ、証拠を見せてよ。私達のことを友達だと思ってるって証明してよ」

いつもめつたに怒らない雪。でも、今怒ってるのは本当に雪が美鈴のことを好きだからってことは分かってる。きっと美鈴も分かってくれると思う。

「私のことそんなに信じられないの？」

「信じられない」

「ならいい！ もう雪なんて知らない」

「いいもん。美鈴はどうせ友達って思ってくれてなかったんでしょ。思ってたのは私達だけなんでしょ。美鈴はひどい人だよ」

その言葉を聞いて、美鈴は教室を飛び出した。美鈴は放課後になっても帰ってこなかった。

「雪ー美鈴に謝りなよ」

「穂乃香は美鈴の味方するの」

「そうじゃないけど」

私は、雪が言っただけのことを正直思ってた。でも、ひどい人だななんて思わない。だって、今まで美鈴は私達と一緒にいてくれた。私は、これでも美鈴の隣にずっと居たんだ。美鈴はひどい人じゃないことぐらい、これだけいれば分かる。きっと、雪も本気でそう思ってるわけじゃないと思う。それに私にとっては、2人とも親友なんだ。だから、ずっと3人でいつしよにいたい。美鈴が雪なんて選べないし、2人がいてくれるから私が今こうやって笑ってられるんだよ。離れたくないよ。

「私は、美鈴のことを友達だと思ってるから。だからこそ、美鈴の口から私達が友達だっていう言葉を聞きたいの。証明してほしいの」

そのとき、前から誰かが走ってくるのが見えた。その人は、私達の目の前まで来て、私達に一言告げた。

「悠樹が！ 悠樹が赤い目になっちゃった」

そう、その人とは……

美鈴だった。

第7話

「悠樹が！ 悠樹が赤い目になっちゃった」

「悠樹さんが赤い目に？ って、どういうこと。美由紀の呪いってこと」

「そうだよ。どうしよう。ねえ、どうしよう」

「そんなの知らないよ。ひとりですぐにかしなよ」

雪は美鈴にひどくあたってた。

「雪、これは人の生死にかかわるんだよ！？」

「穂乃香、いいよ。もったいいよ」

美鈴が悲しそうに言う。

「いいって……」

「雪は、私のこと信用してないから。それに、私は今の雪大っ嫌い！」

それから、雪と美鈴は反対方向に歩いていく。私はどうしていいか分からなかった。だから、その場でずっと立ち止まっていた。いや、正確には、足が動かなかった。

「もう、どうすればいいの……」

「美鈴も、雪も、友達だから……でも、悠樹さんが赤い目になったってどういうことだろう……何で悠樹さんが？」

家に帰ってから美鈴が言ったことを思い出していた。考えてもわかるようなことじゃないけど、なぜか頭から離れない。ベットに寝転んで手を頭の上にやる。目を閉じて少しの時間がたった。でも眠

れない。二人のこと、悠樹さんのこと、美由紀のこと。この短期間で私の周りには事件がおきすぎた。もう頭がついていけないよ。誰かに助けてもらいたい。でもそんな人居ない。ただボーッとしてると、机においてあった携帯がブルブルと体を揺らしながらメールがあったことを報告していることに気づいた。

「誰からだろう」

携帯を開くと

——新着メール2件

の文字があつた。同時に二件来たのだらう。二つは雪と美鈴からだった。

f r o m : 雪

t a t t l e : 無題

『穂乃香、どうしよう。

美鈴と元に戻れないかも・・・。

悠樹さん赤い目になっちゃったっていうし。

でも、赤い目だなんて大丈夫かな?』

f r o m : 美鈴

t a t t l e : 無題

『悠樹。赤い目・・・なおらないよ
どうすればいい？
穂乃香・・・助けて』

2人にどうすればいいか聞かれた。分かるわけない。勝手に振り
回されてる……なんかめんどくさい。もう……メールなんて返さな
くていいや。

この甘い考えが

後の事件を招いたのかもしれない。

私がちゃんとしていれば……

第8話（前書き）

パスワードを忘れてしまい、更新するのがここまで遅くなってしまいました。この場をお借りしてお詫び申し上げます。なんて言うてるけど、別に……って感じですよ。あはは。

第8話

メールが来てから何時間たっただろう。分からないけど、ずっと部屋の隅で体育座りをしている。すると突然、誰か人が入ってきた。

「……誰」

「穂乃香？ 俺、樹。さとういつき 佐藤樹だよ」

「いっちゃん？」

「いっちゃん言うな。おれも子供じゃないんやで」

「いいじゃん」

いっちゃんこと、佐藤樹は私の幼馴染で私の初恋の人。っていつも、今も好き。でも、いっちゃんには綺麗な彼女が居る。私には到底勝てない、とつても美人なひと。

「穂乃香さ、なんか悩んでるやろ」

「えっ」

いっちゃんにはいつでも見透かされてしまう。それが、私の気持ちまで分かってしまうのではないかと、時々不安に思う時がある。

「いっちゃんすごいね。実はさ、友達が喧嘩しちゃって……」

「うんうん」

いっちゃんはただただ「うんうん」としか言わず、私の話をずっと聞いてくれた。

「そうか。色々あったんやな。でも、穂乃香は2人とも好きなんやろ。だったらそれを伝えてきい。きつと分かってくれるはずやで」

「……そう、かな。いつちゃんに話したら、なんか元気だたよ。ありがとう」

「なんや突然。照れるやん」

そんな照れているいつちゃんの顔を見ると、私もつい笑ってしまふ。やっぱりいつちゃんが好きだつて実感する。分かっているよ。いつちゃんに彼女が居ることくらい。分かっているよ。だけど、好きなんだもん。好きだつて気持ちは抑えられない。ただ勝手に好きだつて思っているくらいなら……いいよね。

「いつちゃん。今日、学校で私の気持ち伝えてくるね」

ただそれだけをいつちゃんに伝えて家を出た。まだ外は人通りが少なく、涼しい風が吹いている。しーんとしていて、心がどんどん不安になってくる。2人は仲直りをしてくれるのだろうか……。心配。正直、話を聞いてくれるかも分からないし、私の言うことで気持ちが変わるとは思えない。私にそんな力は無い、自信も無い。だけど、やってみなくちゃ分からないしいつちゃんも応援してくれるし、頑張ろうかなって。

「休み時間に屋上来て。穂乃香」

これだけ紙に書いて、2人の靴箱に入れた。2人は来てくれるのか……。仲直りが出来るのか……。そんな不安だけがどんどん積もっていく。

——休み時間の屋上

「穂乃香。いる？」

「雪。こっちこっち」

「なに、突然屋上だなんて」

「ちよつと話しあつてさ」

「穂乃香」。って、何で雪が居るの」

大きな音を立てて入ってきた美鈴は、雪が居ることにとっても驚いている様子だった。

「二人に話しあんの」

「美鈴居るんじゃない」

雪は美鈴をにらみながら言う。

「2人じゃなきゃ駄目なの。お願い。聞いて」

雪を何とか説得し、話し始める。

「私さ、昔から人見知りが激しくて。だから友達とか全然できなかった。そんな私にさ、2人は笑顔で話してきてくれた。そのときね、実はすっごい嬉しかったんだよ。それから、皆で放課後カフェ行ってお茶したり、好きな男の子の話したり……。いろんなことしたよね。今は、2人がケンカしちゃってる。でも、私2人とも好き。大好き。だから仲直りしてほしい。どっちが悪いとか、そんなの関係ないよ。また前みたいに3人で遊ぼう？ 前みたいに3人で恋話しようよ」

私はそれだけ言つて屋上から飛び出した。2人の答えを聞いてしまうのが怖くて。それに、2人で話をしてほしい。もしそれで駄目なんだったら、これできっぱり諦めるつもりでいる。しょうがないんだって、そう思いたい。そうじゃなきゃ、耐えられないと思う。

それから2時間がたち、授業も終わりがえる時間となった。結局2人はあれから戻ってこなかった。2人で何か話したのかな、2人はどうしたのかな、そんなことばかり思っていた。

「穂乃香」

私の名前を呼ぶ声がする。聞いたことある声。誰だろう。振り向いた先に居たのは……

あの2人だった。

第9話

「穂乃香……」

「雪、美鈴？」

「穂乃香さ、なんか忘れてない」

突然だった。何のことを言っているのか全然分からなかった。忘れてる？ 何を……。知らない、そんなの分からないよ。

「え……」

「穂乃香、私たちのこと大事な友達だと言ってくれたよね？ なのに、何であの時mmを返してくれなかったの？」

mm……。そうか。分かったよ。私が2人に振り回されてるから、もうmmするのがめんどくさい、そう思った時だね。でも、あれは……。

「ごめん。あの時疲れてて、寝ちゃったんだ。だから気づかなかったの。その後はもう返すの忘れてたよ。二人のことで頭がいっぱいでさ」

「そんなのただの言い訳じゃん」

「そうだよ、穂乃香ひどいよ」

その言葉を聞いて、私は思わず言ってしまった。

「なにそれ。mm返してたらよかったの？ そんなの二人だったくさんあるじゃん。ひどいのはそっちでしょう。ありえないよ、何でそんなこと……。私は大事な友達だって、本当に思ってたんだけどな……。でも二人はそう思えないってことだよね」

怒りが爆発した。でも、それとともに悲しさや淋しさも爆発した。今にも涙があふれ出そうな勢いだった。

「そうじゃないけど」

「知らないよ。だって、私のことをそれっぽっちのことで怒ってるんだよ。意味が分からない。もういいよ、もういい……」

いやだった。もう話すのも嫌だった、家に帰って一人になりたかった。でもそれは無理だった。美鈴に電話が掛かってきた。

「そんな……」

「何」

雪が聞き返す。

「悠樹が……突然居なくなっただって」

そこには、ただ

沈黙が流れた。

きつとそれは、赤い目の仕業。

私達の友情が砕け散った今は、

もうそんなこと考えられる余裕が無かった。

でも、悠樹さんが死んでしまったら

もう元には戻れない。そんな気がした。

私は無意識に

動き出していた――。

第10話

ただやみくもに走る。どこへ走っているのか分からなかった。でも、いつのまにか悠樹さんのクラスへと走っていた。教室につくと、悠樹さんの姿は無かった。それもそうだ、と思いながら教室の窓からグラウンドを覗いてみた。そこには、ありえない方向に曲がった手足と、白目をむいている悠樹さんが居た。

「え……悠樹……さん」

急いで階段を駆け下り、悠樹の元へと向かう。

「悠樹……さん？　悠樹さんだよ。なんで？　ねえ、なんで」

そこに、美鈴と雪もやってきた。

「悠樹……」

その一言だけをいい、美鈴は泣き出した。大声で号泣している美鈴に、私は何も言えなかった。ただただ、可哀相で、見ているのも辛くなってこの場から逃げ出したくなった。

悠樹の手の辺りから、赤い血が点々とグラウンドの向こう側まで続いていた。それがとつても気になった私は、ゆっくりとその赤い血を辿って歩いた。

「んっ」

そこにあつたものは、全身が真っ赤に染まり、白目をむいている恵介の死体だった。それはもはや、人間ではなく、今までに見たこ

とのないような醜い姿だった。

「恵介……」

雪も来て、一言呟く。雪の声は震えているようだった。もしかしたら泣いているのかな、なんて思ったから雪のほうを向くことが出来なかった。でも、恵介のことをずっと見ているのもなんか酷で、私は後ろを向いた。でも、そこには校舎に大きく書かれた『コロシテヤル』の文字があった。それは、赤い色、つまり赤い血で書かれたものだった。

「何……あれ」

「ん。どした」

「校舎にコロシテヤルって」

「何あれ！　なんか怖いよ」

「でも……これで終わりってこともあるかもしれないよ」

私はバカだった。こんなんで終るはずが無い。あの美由紀が、私達への復讐をこれだけで終らせるはずが無かった。そう、これは

終わりではなく

これはまだ始まりにすぎなかった――。

第11話

私達が最初の発見者として警察の人に色々聞かれた。でも、私達は何も分からず、

「知りません」

としか答えなかった。正直、赤い目が関係していることは分かる。だが、そんな話をして信じてもらえるはずがなく、信じてもらう気もなかった。それだけは秘密にしておいた方がいいと、自分自身でも思っただのだ。

それから一週間がすぎても、赤い目の新情報は得られず調査は進まなかった。しかし、赤い目の被害もなく、久しぶりに静かな日々が続いていた。でもそれはなぜか不安を呼び起こして、なぜか恐怖感が漂っている。そして私は、まだ美鈴と雪と仲直りをしていない。未だ複雑に糸が絡み合っている状態だ。

「美鈴……雪……」

「どうしたんだ」

「拓哉」

その拓哉とは、泉拓哉いずみたくやといい、同じクラスの男子。実は雪の恋している男の子。話しかけられるとちょっと気まずい。雪は高度の嫉妬症だ。少し話すだけで雪は怒る。めんどくさいけど、でもそんな雪がすき。

「んーごめん。なんでもないよ」

私はその場をなんとなくごまかした。雪に嫌われるのは嫌。とはいいつつ、もう雪には嫌われてるのかな。悲しいのか、目の奥が熱い。涙が零れ落ちそうになった。

「そ、ならいいけど」

拓哉はそれだけ言い、教室を後にする。階段を駆け下りる音がする。拓哉、休み時間だったのに私のこと気にかけてくれたんだ。ありがとう、素直に思った。

「ちょっと寒いな」

窓際の一番後ろが私の席。今日は風が強い。窓が開いていてたくさん風が入ってきた。窓を閉めようと席を立つ。窓の向こう側から聞こえる楽しそうな声が、私の耳に入ってくる。声は運動場で遊ぶみんなの声と、教室に居るみんなの声が重なり合い、なぜだかいつもより綺麗に感じる。ついでに、運動場を見ると、目に入ったのは彼。汗をかきながら走り回る彼の姿が、眩しく見える。太陽の光のせいかな。その瞬間、後ろから声がした。

「何見てるの」

びつくりして後ろを振り返ると、そこに居たのは雪と美鈴だった。

「穂乃香。ごめんね。あれからふたりで考えたの。私が馬鹿だった。穂乃香は私たちのことを考えてくれていただけだったのに。私自分のことで精一杯で……。ごめんね。本当に……」

「穂乃香……ごめんね。私も二人のこと大好きだよ」

私は涙が溢れ出しそうなのを必死に堪えた。だけと思いは虚しく、

涙は私の目から零れ落ちた。二人に抱きつき、思いつきり泣く。好き、好き、大好き。気持ちが涙に変わり、大量にあふれ出る。

もう涙が枯れ果てたかなというぐらいまで泣き崩れた。それから、少し落ち着いて二人に話をする。二人はゆっくり、何も言わず話を聞いてくれた。これから三人で居られることが嬉しい、その気持ちでいっぱいだった。

「穂乃香。今日、いつものカフェよってく」
「うん！」

また平和が戻ってきた、そう思った。もう赤い目のことなど忘れて、ちゃっかり幸せ気分を満喫していた。なんて私は馬鹿だったのだろうか。赤い目を忘れて、後に何が残る？ これから大変なことが起こるうだなんて私には分かるはずもなかった……。

第12話（前書き）

すみません！！

12話と13話を間違えてました！！
修正したので見てください！

第12話

「久しぶりに来たね。このカフェ」

「そうだね。喧嘩してたから来なかったんだよな」

3人で前と同じように話をする。楽しくて、ついつい、顔が緩む。

「あれ」

「何？ どうしたの美鈴」

「あれって、恵梨じゃない」

美鈴が指差した先に居たのは、確かに近藤恵梨^{こんどう えり}だった。恵梨とは、小学生の頃から一緒だった。それから、中学生になって仲良くなることが出来た。恵梨は一人で悲しそうな目をしていた。

「恵梨ーどうしたの」

「あれ、3人こそどうしたの」

「寄り道ー」

「そっか。私は待ち合わせしてるんだけどさ」

私は驚いて、言葉を発せず固まっていた。なぜって。それは、恵梨の目が赤くなっていたからだった。

「え、恵梨？」

「ん、何」

「恵梨……目が」

「え、やだ、もしかして……」

恵梨はカラフルなブランド物のバッグから急いで鏡を取り出した。

鏡に映った恵梨の目は、確かに赤くなっていた。ラメがたくさんついたキラキラの鏡が、恵梨の手から零れ落ちた。酷く動揺した様子の恵梨は、傍においてあったカルピスを全部飲み干した。

「そんな、私……死んじゃうの」

「恵梨！ そんなことない。そんなことないから」

美鈴は、必死に恵梨を慰める。美鈴と恵梨は、以前大親友だった。いくら美鈴でも、大親友のそんな姿を見て冷静でいられるはずがない。

とりあえずカフェから出た4人。恵梨は、外に一步踏み出した途端、一気に崩れ落ちた。しかし、すぐに顔を上げた。それは、恵梨の前にある男が現れたからだった。

「龍……」

「恵梨……？」

「龍……！」

「どうしたんだよ、なあ、恵梨？ 何があっただよ」

そこに現れたのは、さいとうりゅう 斉藤龍。恵梨の彼氏だ。もう、3年近くずっと付き合っている二人。恵梨は龍の姿を見て、龍に飛びつき、泣き崩れた。

「龍ー、どうしよう。私、私死んじゃうのかな。嫌だよ、嫌だよそんなの。龍ともっとずっと一緒に居たいよー」

「恵梨、死んじゃうってどういうことだよ」

「私、赤い目になっちゃったの。呪いは絶対避けられないんだよ」

「！ 恵梨、絶対なんてそんなことないから。恵梨は死なないから」

「龍」

私は、その場からすぐに立ち去りたくなつた。何で私は生きているんだろっ、なぜ私じゃないんだろっ。友達や、友達の彼氏が死んでしまった今、自分にも危機が訪れているということ。呪いは絶対に避けられない。

顔を上に上げた瞬間、背筋が凍るのがわかった。恵梨と龍の後ろに、何かが見えた。

それはなぜか、見たことのあるような

ただ、恐れるべきもの

二人の後ろに居たのは……

あの人。

第13話（前書き）

すみません！！

12話のほうにも書いたんですが、12話と13話を間違えて原稿
してました！！

12話の修正後を見ていない方は先に見てください！！

第13話

「な、何あれ」

あいつは、私のほうを見ている。そう、確信した。あいつは、笑っていた。不気味な笑顔。何かを企んでいる、嫌味な顔。そのとき、私は、背後に迫っていた物に、全然気づいていなかった。

「恵梨」

「……龍？」

「恵梨、俺がお前を守ってみせるから。絶対守るから。もう泣くな泣くなよ」

「龍。ありがとう」

二人を見ていたら、羨ましくなってきた。彼氏が居るっていいな
って思った。私も欲しいな、なんて思っている自分が居る。だけど、
今はそんなことを考えている暇はない。恵梨が死なない方法をどう
にか考えないといけない。だが、どうすればいいかなんて、全然分
からなかった。

「どうすればいいのかな」

「え」

「どうすれば守れる？ どうやって死ぬのかも分からないのに」

確かにそうだった。龍は思いがけない言葉を発した美鈴を見て目
を見開いている。「そうだよな」と呟き、真剣な目をしながら考え
る。

「恵介も、悠樹さんも、無惨な死に方をしてたよ。人間がやったとは思えないような……」

「そうだね。呪いってどうやって……赤い目ってどうしたらなるの。どうして赤い目になると死ぬっていう風になって、それが実現してるわけ」

「分からないことだらけだよ……」

私達がそう話している側で、恵梨は不安そうな顔をしていた。

「恵梨……大丈夫」

「大丈夫。ごめんね、なんか私のことでこんなに……」

「謝る様な事じゃないよ」

「でも」

「恵梨は気にすんな。自分が生きることだけ考えとけ」

「皆……ありがとう」

分からなかった。なぜ恵梨がこんな目にあわなくちゃいけないのか。でも、今恵梨は楽しそうに笑っている。これがこのまま続けばいいんだ。そのために私も出来ることをすればいいんだ。そう思っていた。だがその思いは虚しく、恵梨は倒れた。間一髪で龍が支えたが、恵梨の顔は青白くなっていて、手や足はひんやりと冷たくなっていた。急いで救急車を呼び、病院で緊急手術を行ったが、恵梨はすでに死んでいた。たった数十秒だった。たった数十秒で恵梨は命を落としたのだ。ショックで声も出なかった。龍は泣き叫んでいる。美鈴は崩れ落ち、泣いている。絶対に、絶対に許せない。恵介や、悠樹さん、恵梨を殺した犯人を、私は絶対に許さない。

絶対に。

ただ、美由紀はそれほど、甘くはなかった……。

第14話

「私、絶対許さない」

「なあ、俺にも協力させてくれよ」

「え……」

「犯人探し。恵梨を殺した真犯人、ぶっ殺してやるから」

「でも」

「いいから」

「……うん」

犯人探しなんて、そんなものじゃなかった。だって、赤い目になることも、恵介とかの殺され方は尋常じゃなかった。人間の仕業だとは到底思えない。

「それでさ、赤い目について知ってる人が俺の知人に居るんだけど」

「えっ」

「今から行こう」

赤い目……。ただの呪いだったとしても、私達には関係のない話のはずだった。私はこんな話に首を突っ込んでいてもいいのだろうか。そう、突然不安になった。でも、龍の真っ直ぐな瞳を見ていたら、不安なんか一気に消えた。

——ピンポン

「あの、貴志さん」

「おう、龍やないか。久しぶりやな」

「貴志さん、赤い目について聞きたいんですが」

「……そうか。まあ入れ」

「はい。ありがとうございます」

『赤い目』という言葉聞いた時、貴志の顔が変わったのが目に見えて解った。やはり、何かあるんだと。

「俺の名前は増田^{ますだ}貴志^{たかし}。よろしゅうな。ちなみに、関西出身やねん。あ、自己紹介はここまでな」

「は、はい」

「それで、何を話せばええんや」

「10年前の話だよ。10年前、赤い目はどうやって終ったんだよ」
「話は長くなるが、まあええやろう」

十何人が死んで皆が明け暮れていた頃、女性記者がある真実を発見した。それは、赤い目の事件に大きな影響を与える情報だった。赤い目には、呪いに罹ったことが解る証拠に、赤くなった目と、もう一つあるというのだ。それは、腕に赤く浮かび上がる文字だった。最初に犠牲者になったであろう本宮理沙^{もとみや りさ}は、おひつじ座を意味する『ひ』の文字。次の犠牲者は、おうし座を意味する『う』の文字。その上、その犠牲者達はみんな文字と同じ正座だった。

それからは、警察もたくさんの人が動き出し、史上最強のモノによる、凶悪殺人事件として捜査が行われた。しかし、この事件は到底人間の仕業とは思えなく、醜い姿での死が訪れる。捜査は難航した。新しい情報も無く、少しの手掛かりで捜査を続ける警官達。事情徴収だらけの捜査は、皮肉にも無意味と思われていた。

警察も諦めはじめ、捜査が打ち切りになろうとしていた頃、突然赤い目の呪いが忽然と姿を消した。それから世界は平和になり、今の時代では、赤い目のことを知る人物は数少ない。しかし、この出来事は絶対に裏があるはずだと考えている。ただ、それはなんなの

か、誰もわからない。

「結局、未解決のまま……ってことか」

「そういうことや。誰が犯人なのか、どうして突然終ったのか、そんなの誰も解らないんや。でも、今お前らがここに居るってことは、赤い目がまた始まったんやろ」

「はい。俺の彼女は赤い目の被害になったんです。だから、絶対犯人を見つけてやろうって」

「もしかしたら、赤い目には犯人なんて居ないんちゃうか」

「え……」

「元から犯人なんて存在しいひんねん。きつと」

増田から、10年前の話を聞くことは出来たが、まだわからないことだらけだった。たった一つ、『腕に浮かび上がるあざのような物』が犠牲者にはあるということがわかっただけだった。しかし、これが事件解決への糸口となる、ということは、まだ誰も気づいていなかった。

第15話

「犯人は居ない……か」

「でも、そんなことってあるのかな」

「そんなのわかんねーよ。これから、調べていこう」

「……うん」

とりあえず、被害者の体の一部に痣のような物があるかどうか調べてみることにした。まだほとんどのことが解決していない今は、一歩一歩調べていく必要があった。

「痣なんて本当にあるのかな。不思議なことが多すぎて逆に信じられなくなってきた」

「確かに。だけど、それって普通なんじゃねーの」

「確かに」

やっと笑えるようになってきた。だけど、龍はやっぱり笑ってない。恵梨が本当に愛されてたんだなって、今更だけと思う。きっと恵梨は幸せだったと思う。だけど、もっともつと幸せになれたはずだった。恵梨も龍も。やっぱり許せないと思った。

「早く行こう。早く」

「穂乃香……」

「そうだな。行って見なきゃ何にもわかんねーんだ」

「緊張する」

「だね」

痣のことを伝えたと、警察の人は調べてくれた。待っている間は誰も喋ってくれなくて辺りはしーんとしていた。というより、誰も喋れる雰囲気ではなかった。それから数時間がたち、警察が来て結果を伝えてくれた。

「皆さんが言っていたとおり、死体の一部に痣らしきものが残っていました。見つけられた順番と同様に星座が描かれていました」

やっぱりそうか、と皆が思った。だけど、龍だけは違った。

「待ってくれ。恵梨が殺されたのは、3番目だろ。つまり、双子座の痣……。でも恵梨は双子座じゃなくてうお座だ。おかしくねーか」

「痣の星座と本人の星座が違うってこと？」

「それじゃあ、どうしてそういう順番なのかわからないじゃん」

「何の解決法にもなってるねーよ」

「なに……それ」

解決に近づいたと思った。もうすこしでゴールだと思った。全然違ったのだ。まだまだゴールなんか見えてなくて、見えていたのは障害物だけで、ただ前の見えない暗闇の中で歩き回ってただけだった。

「おい、これからどうすんだよ。何にも手掛かりねーじゃねーか」
「そーだよ。どうしよう」

とにかく、まずはさっきのカフェに戻ることにした。戻ったとこ

るで何がわかるわけでもなかった。でも、このままここにいる気分にはなれなかった。気まずい雰囲気のまま、カフェに向かう。

皆不安だった。次は誰が襲われるか解らない。そんな時に、自分が襲われると思わない奴は居ない。次は自分かもしれないという恐怖を抱えながら、皆必死に生きているのだ。今までは命を大切にしようとは思っていなかった。絶望の淵に立たされた今、やっと命の大切さに気づいたのだ。穂乃香はふと思った。美由紀は復習をしているわけではないのかもしれない、と。話を聞いていると、どうも美由紀が悪いやつだとは思えない。もしかしたら、なにかを訴えようとしているのかもしれない、何かを伝えようとしているのかもしれない。この事件はまだ始まったばかり。何が起こるか、誰にもわからない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2179d/>

赤い目

2010年12月30日02時57分発行